カポエィラを通じた日本への還元

荒川 幸祐　カポエィラ・アンゴーラ　グループインジンガ京都代表

自己紹介

京都出身、写真家。幼少期に数年間アメリカで過ごしたことや、大学でスペイン語を専攻するなど、他言語や多文化に強い関心を持って育ちました。スポーツや身体を動かすことと、多様な国の音楽にも興味を持っていたことから、身体表現と音楽の融合性のあるカポエィラを知ったときは心がすごく躍動したのを覚えています。2002年から京都でカポエィラを学び始め、その後幾度もブラジルへと渡り、理解と関心を深めていきます。2009年からサンパウロで写真の仕事と勉強をするために現地へと渡り、同時期にカポエィラ・アンゴーラのグループインジンガに入門、2013年は本部のあるサルバドールに滞在しカポエィラの修行に励みました。

カポエィラとは

格闘技とダンス、音楽と遊戯、さまざまな要素が融合した、ブラジルの伝統文化。輪になった人が、楽器を演奏し長いあいだ歌うなかで、二人のプレイヤーがリズムに合わせて、即興の駆け引きを繰り広げます。

カポエィラの歴史は古く、16世紀にはその存在が確認できます。当時アフリカからブラジルに奴隷として連れて来られた人びとが、自由を勝ち取るための術として独自に育んできました。その後、弾圧の時代を乗り越えて、現在では人種や老若男女を問わない幅広い層に支持され、ブラジルを代表する文化となっています。

現在カポエィラには、大きく分けて「カポエィラ・アンゴーラ」と「カポエィラ・ヘジョナウ」の二つの流派があり、世界170か国以上に愛好者がいます。

カポエィラ・アンゴーラとは

1930年代当時、あらゆるアフロ・ブラジル文化と行事は弾圧され禁止されていました。当時は公共の場所でカポエィラをすると警察に捕まりその後の釈放は約束されないなど、不平等な世の中でした。そういった中、カポエィラという名前を使わずに、「バイーア地域の格闘技」という名称で世に紹介し学校を開いた人物、メストレ・ビンバがいます。そのスタイルは瞬く間に白人層、アカデミックな分野と富裕層の理解に繋がり、カポエィラ界に大きな影響を与えました。

1940年代に入ると、その新しい流れとは逆に、元々その土地で古くから行われていたカポエィラを残し、価値を与えようとする派閥に分かれ、それを当時のメストレ・パスチーニャがカポエィラ・アンゴーラと名付けます。彼は格闘性や身体性を重視したカポエィラに移行していく中で、文化伝承としてのカポエィラを残すことに生涯をかけました。

カポエィラを学び始めたのは

初めて音楽を聴いたときに、体全体で感じた感動を覚えています。衝撃が走ったといいましょうか。とても良い音楽、好きな音楽を聴く時のように、身体の中を心地よい感覚が流れていくのです。その音楽の中で踊り、闘い、身体を動かすことは、自分にとって悪いはずがないと思いました。あれから14年経ったいまでも、良いカポエィラの音楽が流れたときは身体から自ずと力が湧き出て、ずっと動いていられる感覚になります。自分にとってこれは良いことなのではないか、という直感を信じた結果、今まで続いているのだと思います。

カポエィラ・アンゴーラとの出会い

元々京都で始めたカポエィラは、カポエィラ・ヘジョナウとアンゴーラをどちらも行うグループで、アンゴーラの存在はとても気になっていました。どちらかといえばカポエィラ・ヘジョナウのグループでしたので、アンゴーラの練習は少なく、理解もそれほどできて

いなかったのかもしれません。しかし、幾度もブラジルを訪れ現地のカポエィラに触れるなかで、特にカポエィラ発祥の地とも言われるサルバドールで、自身の道の方向を変える出来事がありました。

現地に行くと、両方の流派をしているということで苦笑されたり、差別されるようなこともありました。しかしそれぞれの流派の根源にいくと、それぞれが守ってきているものや、長年続けているものがとても強く感じとれ、現地を離れて特に大都市であったり外国に渡っていくカポエィラの概念が、まったく違うものに変化していることに気がつきました。カポエィラ・ヘジョナウもカポエィラ・アンゴーラも同じカポエィラから来ている、という単純なことがとても明白に見え、感じられたのです。

そして動きだけでなく、その音楽性やメストレ達からの知識と知恵が、生きていく中でのとても価値のあるものだとも気付かされました。京都に戻ると元々のグループで活動はしていましたが、やはり何度もブラジルに渡るに従って「一度今までのスタイルから離れ、カポエィラ・アンゴーラを一から学びたい」という強い気持ちが芽生えました。そしてサンパウロにあるグループインジンガの支部を偶然見つけた時には、すでに学んでいく気持ちが固まっていたのです。

メストレ達とのイベントを企画することになった契機

幾度となくブラジルへと渡っては日本へ戻ってくる間、カポエィラとは自分だけが学ぶ場であり、自分の喜びでした。しかし徐々に日本になんとか還元できないかと思うようになりました。グループインジンガの師範３名一同を日本に招待することが、日本でのさらなるカポエィラ・アンゴーラの普及と発展、理解へとつながると、現地にいた時に強く感じました。カポエィラを学ぶ人達、日本のカポエリスタ達は真面目で積極的に活動しています。自分の学ぶカポエィラ・アンゴーラとその師範達を日本に招待することで、より多くの方にカポエィラ・アンゴーラを実感して頂き、肌身でふれて感動する場面を作り、より多くのカポエィラ理解者と愛好者を増やす手助けがしたいと思いました。

異文化の理解を自身の文化への理解へとつなげられることや、身体を動かして相手とコミュニケーションをとるという人間味のあることを学ぶことができるのは、大変重要な経験です。カポエィラは人種と国籍、性別と文化の壁を越え、人と人をつなげるツールです。長年にわたって教えを説かれている師範達を日本に招待できるのはとても稀な機会でもあり、それだけ重要なことだと思いました。

イベントの成果とこれから

ブラジルでも日本でも、カポエィラの中で師範達が集まる機会は珍しく、想像を超えたエネルギー、喜びと感動が起きるものです。そこではカポエィラの教えや教訓、人生をより幸せに生きていく中での答えが少しずつ伝授されていきます。

現地でもよく言われる言葉があります。「本当に良いカポエィラを学ぶためには、メストレの近くにいなさい」。日本の皆さんが幾度なくブラジルに行かれるのも、メストレが来日したときにわざわざ足を運ぶのも、その理由は、動きや音楽だけでなく様々な知恵を伝授してもらえるからです。それは秘伝の術のような繊細で非常に意識の高い修行の積み重ねが織りなす技なのです。それを学び、人生をより自分らしく生きていくのがカポエィラの中に隠された本当の自身との戦い、遊び、護身術なのではないかと思います。

日本では20年間カポエィラを学んでいる方はほとんどいませんが、今回ブラジルで30年以上学び、教える師範を招待することで、私たちのカポエィラとともに生きる長い人生の中に、ある道標を伝えて頂けたのではないでしょうか。今回はその奥深さや楽しみ方を日本で実感し体験していただく場を設けることができて、大変嬉しく思います。今後も日本に師範を招待するイベントを開催し、このような場を増やしていくことの重要性に気づくこともできました。

男性中心の文化であったカポエィラが、現在はほぼ半数が女性となり、女性の師範もいる中、今回のイベントで女性師範を２名迎えられたのは重要なことだ考えています。女性としての見本となるような人物が１人でも多くいることは、強い心の支えになると思います。私一人だけでなく、私の学ぶグループインジンガのすべてのメンバーが実感し、信じている、愛のあるカポエィラ、差別と暴力のないカポエィラを目指して、私たちは伝統的なカポエィラ・アンゴーラをこれからも享受しつつ学び続け、伝えていくことができればと思っています。

今回のイベントを開催するにあたって、たくさんの方々の多大なるご協力とご支援を頂きました。さらに関係者のお力により出版物やDVD制作まで実現することができたことを大変光栄に思います。この場を借りて皆様に感謝の気持ちと、今後とも末長く関係を続けて頂きたいと願っていることをお伝え申し上げます。皆様、ありがとうございました。